

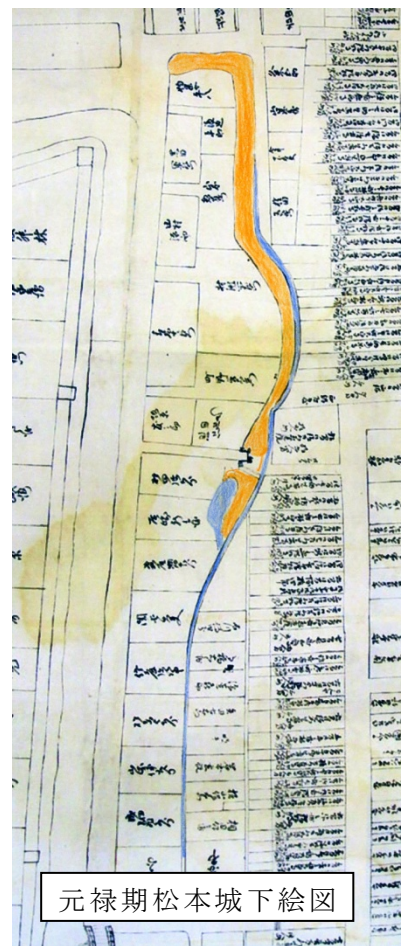
城下町探訪 16

2009/7/16

すてばりどるい 残存捨堀土塁

①捨堀土塁の位置

捨堀土塁は総堀北東隅のざらに外側に築かれた土塁です。左図は「天保六年南北深志絵図」です。捨堀の長さは、およそ140mあります。当初この土塁が造られたときには土塁の前面すなわち、図では土塁の右側に堀があったはずですが。しかし「元禄期城下町絵図」にはすでに埋め立てられて武家屋敷が4軒配置され捨堀町と呼ばれています。そして土塁の東側にわずかに水路が南に向かって存在しており、早い時期から堀は埋め立てられていたのではないかと推定されます。現在残存する捨堀土塁はA地点とB地点です。



元禄期松本城下絵図

A地点は天保6年には板橋兵左衛門で後、菅谷司馬の屋敷にかわったものと思われます。B地点は尼子右膳の屋敷となっています。

A地点は現在、宗教法人の教会となっており敷地の北西の隅に捨堀土塁の一部が築山として残されています。教会となる前は長屋門をもつ代議士棚橋小虎氏の住宅で母屋の東側、すなわち、捨堀土塁の西側には祠があり庭木が植えられていました。



A 地点宗教法人の教会内に残された捨堀土塁



B 地点醸造業を営む商家の庭の築山として残された捨堀土塁

B 地点は醸造業を営む商家の庭の築山として保存されています。土塁の上には、お社^{やしろ}と庭木が植えられています。

②なぜ捨堀土塁と呼ぶか

現在2つの説があります。その1は松本城の天守を創建した石川康長がさらに城の守りを固めるために総堀の外側に、それを取り囲むように堀を掘り土塁を築き始めた。ところが慶長18年（1613）大久保長安事件に連坐して改易され九州佐伯に配流となった。そのため未完のまま捨てられ、そのままにされた堀ということで「捨堀」と言うとの説です。したがってこの捨堀の「捨」は「棄てる・放棄する」あるいは「すてっぽかす」の意味です。

その2は明治29年や明治38年には松本の町は大水害にあいますが、まず、明治38年の状況は「旧松本史下」によると、6月21日に女鳥羽川堤防、岡宮東にて決壊、裏町・鍛冶町・餌差町・東町・出居番を流れ下馬出^{しもうだし}にて女鳥羽川と合流している。明治29年7月21日の水害は開闢以来といわれる被害が甚大なもので、女鳥羽川が水汲^{みずくま}および裏町辺数カ所で決壊し安原・裏町・和泉町・餌差町続いて東町・出居番から濁流は片端の堀に押し入った。出居番より上土町は本瀬となって縄手辺で女鳥羽川に乱注すと書かれています。また、片端の堀より堀づたいに北馬場・西堀・今町に激しく流れたとあります。このような水害の状況から見て女鳥羽川が水汲から岡宮南辺で決壊すると濁流は東町通りを流れ下り出居番から片端の堀を襲う。また、片端の堀から堀づたいに、増水した水が北総堀を西に流れ北馬場や西堀・今町に被害をもたらしています。

このような後世の水害の実態から推察すると北に高く南に低い扇状地の斜面に作られた松本の城下町では上流で女鳥羽川が決壊した場合、東町を流れ下る濁流が新町辺から東総堀・北総堀へ流れこんで堀を土砂で埋める危険性をはらんでいました。そこで東総堀の東側に洪水の濁流を防ぐための土塁を築いたという説です。

この場合の「捨堀」の「捨」は囲碁の捨て石と同じ意味の「さしあたって効果はないが将来役立つことを予想してする予備的行為」という意味になります。